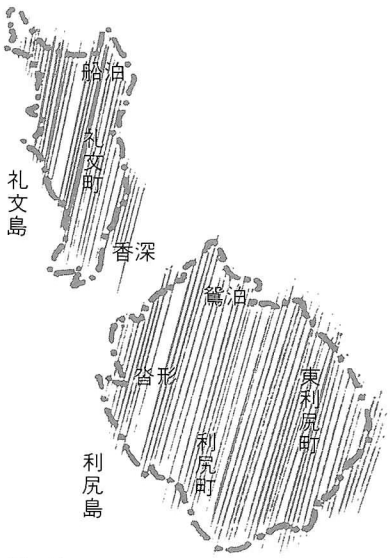
北海道

利尻・礼文島

最北離島の寺院は ニシン漁の 盛衰とともにあった



《人口減少》若者は職を求めて島を離れ、老人もやがて後を追い、急激に過疎化が進行した。

利尻島は、北海道の最北端稚内から西へフェリーボートで二時間の航程にある北の海に浮ぶ離島である。礼文島はさらに北、航程一時間のところに位置する。行政的には利尻島が東利尻町、利尻町の二町から、礼文島が礼文町の一町から成る。

人口が著しく減少しており、利尻島では昭和三〇年の二万一、二五九人から昭和五五年には一万一、八五五人へ、礼文島では同じく九、八七四人から五、九五一人へとそれぞれ四四%、四〇%の人々が流出した。

昭和二八年を最後としてニシンが全く獲れなくなり、主産業の漁業に見切りをつけて人々は島を去っていったのである。今は人口増減が横ばいであるが、働ける若者が流失し尽くしてしまった状態だからだという。

《利尻・礼文開教の歴史》来島者は出身地での宗旨をかたくなに守り通してきた。

明治になってから、「浜に札束がつきあがる」とまで言われた豊富なニシンを求めて移住した人々が、故郷の先祖伝来の宗教を移入するとともに、明治二〇年以降には仏教各派は説教所や寺院を次々に設立していった。

移住者の中では浄土真宗が盛んな石川県からの人々が一番多く、「能登衆」「加賀衆」と呼ばれ浄土真宗が盛んになるもととなった。現在、利尻島には、浄土真宗系六、禅宗系四、日蓮宗三、浄土宗二、計一五ヵ寺あり礼文島に、浄土真宗二、浄土宗二、禅宗系二、日蓮宗二、計八ヵ寺の寺院がある。

《檀家の減少》急激な檀信徒の減少で、寺院の経営が困難となり、後継者にも恵まれない本宗寺院。

昭和三〇年代に入ってからの激しい人口の流出で、過疎化が進行し、調査をした日蓮宗五ヵ寺では一寺院の例外を除いて、檀家が最初の三〇%にまで減った。例外の一寺院は港と空港がある利尻島の中心地鴛泊（おしどまり）にあって、かつ、一〇キロ余り離れた沓形地区の無住寺を統合した例である。

ニシン漁が途絶して起った構造的不況にあえぐ地域の中で教師は、数少なくなった檀家をどのように教化し、寺院を護持していくのか。しかも、他宗寺院ではすべて後継者が決まっているというにもかかわらず、日蓮宗寺院では、後継者難の苦渋がうかがえる。

《日蓮宗寺院五カ寺の現状》

（A寺）離島の児童福祉・幼児教育に生きる。（東利尻町鬼脇）

現住職が昭和二八年に派遣開教師として来島した時は、三年後には内地に戻るつもりであった。当時番屋のような小屋、裸電

写真1　35年になるA寺の本堂

球が吊してある寺に入って、島流しにあったような暗澹たる気持ちを味わったという。しかし、大人たちがニシン漁に忙殺されている間に、子供達が水死や事故で犠牲になっている現実を見て、本堂で保育園を開設した(写真1)。

これまで千余名の園児を送り出し、今では「**島の良寛さん**」と慕われる住職は、在島三五年、地域の人々と苦楽を共にした教化活動を通して信頼を得ている。

現在、檀家は一〇六戸から四〇戸に減少。寺は年間九〇万円の檀家の拠出金で営膳され、月回向まわりが主な布施収入である。住職の三人の子息は島を離れ、後継者ではない。

住職は「**一ヵ寺ごとの力が弱くなった今、宗門の力で離島寺院が相互に利用できる布教情報センターを建てられれば法の輪を広げる可能があるのだが**」と提言している。

(B寺) 無住寺を信仰の寺に復興した。(東利尻町鴛泊本町)

この地区の有力な網元が、島での漁業を見限って稚内に転出し、従業員もそろって移住していったために、B寺の檀家は一二〇戸から六七戸に減った。残った住民一七〇人は老人世帯、独居老人が多い。「**自分たちの代で島は終わりだ。一〇年後、お寺の檀家はどれくらい残っているだろうか**」という。

B寺がかつて住職常住でなかった頃「**離島の少数檀家寺では今後成立ってゆかない、統合すべし**」という意見が多数の檀家から出て、ある寺院への合併統合が考えられた。しかし、五、六戸の檀家が反対して不成立に終わり、併合の困難さを知らされたという。B寺の住職は、柔道六段という特技を生かして青少年育成・社会教育に取り組んでおり、過疎地の無住寺から常住寺へ、困難な環境のもとで地域のリーダーシップを発揮している。

(C寺) ニシン漁が途絶え構造的不況が定着したために、護持が不安定である。(東利尻町鴛泊本町)

C寺は島の産業・経済・観光の中心地である鴛泊にあり恵まれた環境にある。檀家は昭和初期の六〇戸から昭和三〇年代に隣村の寺を併合して二〇戸増え、さらに現在は一〇〇戸になった。しかし、現在の同地区の人口は漸減状態にある。住民の収入の中心である漁業収入は、一人当り年間九〇万円前後であり、かつてのニシン漁の比ではない。冬期間の出稼ぎや、水産加工関係の日銭稼ぎは他地区より多いが、離島の過疎地が経済的に不安定であることに変わりはない。

また鴛泊は利尻島の観光の玄関口であり短い夏の間に三八万人が訪れるが、これとても島の経済を支え潤すものではない。

一見恵まれたC寺であるが、寺院を護持する檀家の生活不安は深刻であることに変わりはなかった。

(D寺) 開拓地開教に生涯をかけて住職五〇年。(礼文町香深)

D寺は昭和二〇年代に一五〇戸の檀家があったが、現在は四七戸になり、島内全寺院の中で最少である。寺の維持の困難さが想像されるのだが、現在、庫裡増築事業が進行中である。三宝尊の修復や堂宇の整備の多くは、住職が布施収入のすべてをそそぎ込んで進めたものであるという。

ニシン漁が盛んな時には、航海の安全・豊漁の祈祷をすることが多く、来詣者のうち四〇%は他宗の人々であった。来島以前の宗旨を固く守っていた人々の中にも修法布教が縁となって改宗する人もあった。

住職歴五〇年のN老僧は、かつて陸別の法華村に説教所(前啓寺)を開き、開拓者の心の支えとなった故広瀬啓宣師の弟子であって、まさに北海道開拓開教の尊い生き証人といえる(写真2)。ここでは最近幸いにも子息が後継の手続を進めることになった。

(E寺) 開拓労働の息吹きとともに育てられた信仰心は、過疎という困難に直面しても絆の強さをゆるめない。(礼文町船泊)

E寺は日本の最北にある寺院である。昭和六〇年に若い住職夫妻が新任して檀家のかける期待は大きい。「日蓮宗の為には、今までの二倍も三倍も骨折ってもらわねば。命日には、皆、待っているよ。雪あけの春のお彼岸を勤めてほしい」と、檀家の一人は熱を込めて語る。

女性が世話人として活躍していて、和讃講が盛ん。題目修行を中心とした先祖回向や法楽加持に二〇~三〇人が集り行われている。人々の信仰心には、かつての開拓者達と同じ熱いものが流れていると感じられた。

昭和三九年に七〇戸あった檀家は、六一戸に減っている。寺門の経営の苦しさが推察され、住職の兼職も考えられるが、檀信徒はそれを望まず、物心両面の外護を約束しており懸命にそれを実行していて、供養の品が絶えないという。

今でこそ過疎が進んでいるかつての開教の地、日本の最北の寺院に結ぶ寺檀の絆には強いものがある。

写真2　開拓開教を展開した広瀬啓宣師と弟子達（昭和13年小樽市妙龍寺にて）

《まとめ》

かつて、島の隆盛と共に、幾人もの開教布教師が教線を張った町には、依然として今でも、強い信仰心があると感じられた。が、教師の姿には、ニシン漁の不漁と共に生じた構造的不況の中で揺れる檀信徒を、どのように教化してゆくのか、寺院護持をどのようにしてゆくのか、苦悩がうかがえる。離島の過疎地での布教は、教師と寺族の身命をおしまない、渾身の努力によって、辛くも支えられている。

この現実を「**日蓮一門**」の我々が、このままにしてよいかどうか、考えさせられるのである。